

日経新聞
2011.07.09 掲載

全身の筋肉動かなくなる難病

ALS 新薬臨床試験へ

東北大学

東北大学は8日、全身の筋肉が次第に動かなくなっていく難病、筋萎縮性側索硬化症(ALS)の進行を遅らせる新薬の

臨床試験(治験)を8月にも始めると発表した。神経細胞を保護する働きのあるたんぱく質を投与し、安全性や効果を調べ

る。3〜4年後にも実用化したい考えだ。ALSは運動神経が徐々に死滅し筋肉が動かなくなり、最後は呼吸もで

きなくなる。原因はわかっておらず、治療法がない。国内患者数は約8500人。

治験は青木正志教授らが東北大病院で実施する。学内の承認が得られ次第始める。発症後2年以内の患者12人に運動神経を保護する肝細胞増殖

因子(HGF)を投与し、まず安全性を確かめる。順調にいけば、患者数を拡大した第2段階の治験に移行する。

HGFを使ったALS治療について、東北大は慶応大やバイオベンチャーのクリングルファーマ(大阪府豊中市)と共同研究を進めてきた。ALSを発症させたラットを使った実験でHGFを投与すると、神経が減るのを食い止め病気の進行も遅くなった。治療しない群に比べ寿命が1・6倍になった。HGFを脊髄損傷の治療に役立てる研究も進めており、今回の治験を脊髄損傷治療の実現にも役立てたい考えだ。